# 平成９年度病害虫防除基準（水稲）に採用した主な薬剤とその使用法

（農試　環境部）

## 1　背景とねらい

病害虫防除において、最近の栽培法の多様化、病害虫の発生動向の変化などから、これらに対応した的確な防除法の開発とその実用化が望まれている。

新規登録農薬等について検討した結果、本県のいもち病、紋枯れ病、初期害虫について、防除効果、および安全性の面からも適用性が高いと考えられる薬剤を防除基準に採用したので、薬剤の特性、使用法について解説して、指導上の参考に供する。

## 2　技術の内容

平成９年度病害虫防除基準に新たに採用した主な農薬およびその対象病害虫は、以下のとおりである。また、その使用法と使用上の留意点は表１に示した。

（１）フラメトピル剤……紋枯病
（２）ピロキロン・フラメトピル剤……いもち病、紋枯病
（３）イソプロチオラン・フラメトピル剤……いもち病、紋枯病
（４）ピロキロン剤……いもち病（穂）
（５）フラチオカルブ剤……イネミズゾウムシ、イネクビホソハムシ
（６）エトフェンプロックス剤……イネクビホソハムシ

## ３．指導上の留意事項

表１に示した。

表1　平成9年度病害虫防除基準に採用した主な農薬の使用法と使用上の留意点

| 農薬の種類<br>［農薬名］（成分量） | 対象病害虫 | 使用法 | 使用上の留意点 |
|---|---|---|---|
| フラメトピル剤<br>［リンバー粒剤］<br>（1.5%） | 紋枯病 | 使用時期：出穂前30～5日<br>使用方法：4kg/10aを湛水散布する。 | 1．紋枯病の要防除判定は、従来とおり出穂約1週間前～出穂期の発病株率（早中生品種15%、晩生20%以上）を目安とする。<br>2．混合剤の使用時期は、穂いもち剤の使用時期にあわせて適期幅が狭くなっているので、同時防除をする場合は注意が必要である。<br>3．疑似紋枯症に対してはいずれの剤についても摘要登録が無いがフラメトピル剤については効果が認められた試験事例がある。<br>4．粒剤の施用に当たっては、防除基準に掲載した水面施用剤の留意事項を参照のこと。 |
| ピロキロン・フラメトピル剤<br>［コラトップリンバー粒剤］<br>（ピロキロン 5.0%）<br>（フラメトピル1.5%） | いもち病<br>紋枯病 | 使用時期：出穂前20～5日<br>使用方法：4kg/10aを湛水散布する。 | |
| イソプロチオラン・フラメトピル剤<br>［フジワンリンバー粒剤］<br>（イソプロチオラン 12.0%）<br>（フラメトピル 1.5%） | いもち病<br>紋枯病 | 使用時期：出穂前20～10日<br>使用方法：4kg/10aを湛水散布する。 | |
| ピロキロン剤<br>［コラトップパック剤］<br>（24.0%） | いもち病（穂） | 使用時期：出穂前20～5日<br>使用方法：50gのパック剤を10a当13個、均一に投げ入れる。 | 1.処理時には水深3～5cmとし、散布後3～4日間は水の移動はしない。<br>2．表層剥離、藻類やウキクサ等が多発していると拡散が妨げられ効果が低下するので使用しない。<br>3.黒ボク土壌では、効果が低下するので使用しない。<br>4.葉いもちにも効果は認められるが、投げ込み位置と離れた場所での防除効果にふれが大きいので防除基準には採用しなかった。<br>5.葉いもちが多発している条件下では防除効果が低下するので、葉いもち防除を徹底したうえでの使用が必要である。<br>6.施用時は、投げ込み位置については均一になるように、また投下量についても 厳守する. |
| フラチオカルブ剤<br>［デルタネット粒剤］<br>（2.5%） | イネミズゾウムシ<br>イネクビホソハムシ | 使用時期：移植直前～移植時。<br>使用方法：40～50g/箱を育苗箱に施用する。 | 1．使用にあたっては、防除基準の育苗箱施用上の留意事項を厳守する。<br>2．カーバメイト系殺虫剤抵抗性虫に対して効果が劣ることがある |
| エトフェンプロックス剤<br>［トレボン粉剤DL、同乳剤］<br>粉剤DL（0.5%）<br>乳剤（20.0%） | イネクビホソハムシ | 使用時期：幼虫の加害盛期（6月中～下旬）。<br>防除方法：粉剤は3～4kg/10a<br>乳剤は2000倍液を70～90l/10a散布する。 | 1．カーバメート系殺虫剤抵抗性の発現したイネクビホソハムシに対しても効果が高い。<br>2．本剤は養蚕地帯では使用しない。 |